

「勉強」という訳語について

深澤助雄

はじめに

- 一、幕末に於ける勉強概念
- 二、松下村塾に於ける勉強の意味 —— 「高杉晋作日記」に見る ——
- 三、心学の系譜
- 四、兵法家・剣術者と勉強
- 五、中村敬宇とその勉強困学の生涯
- 六、「西国立志編」の訳業について

はじめに

「勉強」は日常会話に頻繁に用いる邦語であるが、「中庸」第二十章にその典拠をもつ、歴とした漢語である。従って漢文、或いは漢文脈の用例は枚挙に遑がないと言ってよく、このような言葉を「譯語」として扱うということに対しては、いささか奇妙な感を抱かれるかもしれない。そこで最初に「勉強」を譯語として検討することに關して問題の所在を示しておきたい。

「勉強」という言葉がこんにちとびかっている一つの場面は、親子の間、それも特に学齡期にさしかかる子ど

もから、大学受験を前にした高校生といった年代の子をもつ親子間においてであろう。親から子どもに向けて投げられる「今日はちゃんと勉強したか」「しっかりと勉強しなさい」とか、「勉強のできる子」「勉強の嫌いな子」といった言葉、さらには「勉強次第ではもつといい成績がとれるから…」というような励ましが日常会話で繰り返される。ここで勉強は専ら正課としての学業にかかわり、しかも特に知的な学習にかかわるものであることは言うまでもない。「正課として」という限定を加えるのは、義務教育から高校卒業までの学習指導要領に示されている、段階を追った習得内容を念頭においているからであり、「知的な」といわれるのは、正課であつても音楽や美術、体育等の科目にかかわるものには「稽古」という言葉が用いられるのが通常だからである。ともあれ、勉強という言葉に喚起されるニュアンスは一人一人にさまざまな違いがあると思われるが、その語義についてのくいちがいはほとんどないといつてよいであろう。そしておそらく勉強という語がもつ幾つかの意味、たとえば取り組んでいた一つの事柄が、うまくゆかなかつたとき、或いは不愉快な事柄に巻き込まれてようやくこれから脱け出られたとき、「今回のことは、授業料は高くついたが勉強になった」というが、こうした言表にみられる「勉強」にも共通の語義が拡張された跡を見ることができよう。そこには「辛い経験をしたが、今後こうしたいひどい目に会うことが避けられるようになるとしたら、いいことを学習したのだ」という意味がこめられており、これは人生という学校に於いての一つのカリキュラムをこなしたということになるのである。ここで不本意なことにまきこまれるのは、勉強嫌いな子どもでも学校にいる間は嫌いな学科を学ばなければいけないことと類似の事態として受け止められている。そしてさらに言えば、子どもは嫌いな学科を好きになるように勉強しなければならないのだし、好きになれないとしても必要最低限の知識は学校にいる間にマスターするように勉強しなければならぬ。そもそも個々人の趣味嗜好や適性の有無とは関係なく誰でも共通に知っておかなければいけないことはあるので、それを強いるのは、一種の親心であると思われていると

言ってもよい。それは丁度ニンジンの嫌いな子、或いは玉ねぎが、ピーマンが嫌いな子がいても身体を作るためにはどうしても食べさせなければいけないという気持ちにも通ずるものとして、まずは許容されてきたものである。

勉強という言葉で何が謂われているか、系統的な語義分析に比すれば、右の分析は粗雑なものに過ぎないが、今日「勉強」が知的学習の場に於ける努力を指していること、そしてこの努力はその対象の好き嫌いを越えて要求されているものであるということが誰にも納得されていることだけは知られよう。しかもここには同時に嫌いなことだから、或いは放っておけばしないことだから、無理矢理に強いて勉めることが努力なのであり、楽しいこと好きなことに力を注ぐのは努力とは云わないのだという思いも、問わず語りに浮かび出ていると云ってよい。

ところで先に正課であつても音楽や美術・体育などの授業に於いて培われ、涵養される能力についてはそれらを習得するために努力する時に、勉強ではなく稽古という言葉が使われるとして、所謂実技系の学科は勉強の対象からは排除されていることに言及したが、今日では誰も問題にしないこのことは、少し歴史を遡つてみれば、いささか問題を含んでいることにも気付かされる。それはどういふことかと云えば、江戸時代の文献では、今日「知的学習」或いは「知的能力の涵養」にかかわると思われていることにも「稽古」という語をあてているのがみられ、しかもそれがちつとも特異な事例ではないということをいくらでも示せるからである。こうしたことに対しては単に、当時は知的能力の涵養に関して要求される水準が今日ほど高くはなかつたから、実技系の学科が単調な反復練習を事とする「稽古」で語られるのと同様に、読み・書き・そろばんの学習や、素読などに於ける知的訓練にも稽古という言葉をあてはめても十分にこと足りたのだという意見がありうるかもしれない。しかし事態の根底にはこういつた理解ではとらえきれないものが潜んでいるように思われる。こ

のことはたとえば文明開化期の文章「西国立志編」に類出する勉強の原語にあたって見るだけでも予想できるのである。「譯語としての勉強」という視角には特に深い意図があるわけではないが、サムエル・スマイルズ原著「自助論」が「西国立志編」として訳出されたとき、勉強はキーワードのひとつとなっていること、そしてここに語史上の変化につながる作用が起動し始める一つの理由があることに着目するからである。小論では、今日勉強という言葉が用いられるとき、この語は漢文脈のそれに比しても、又、明治以前の日本語の含意とも相当にかけ離れていることを示し、次いでこのような変化の生じた原因について考えてみたいが、これにはまづ手始めに幕末に於ける用例の検討が必要である。

一、幕末に於ける勉強概念

幕末に「勉強」という語がどういう意味で用いられていたかを網羅的に検証することは、小論にはできない。それは、語義の変遷を辿るには目を通さなければならぬ文献資料が多岐にわたり、且つ龐大なものであるために、片々たる小論の枠におさめることが困難であるということだけでなく、そもそも「勉強」に近似、類似する用語に関する精査もまだ十分にはできていないからである。そこで小論に於いては、一、「勉強」が口端に上った集団、或いはこの概念がなほどうか行為規範につながっている思想運動を幾つか選択すること、二、勉強に近似する概念には、若干の保留条件をつけて取捨すること、とした上で具体的な検討に取り組むこととする。

さて管見の及んだ範囲で勉強がよく出てくるものとしては、とりあえず次の四つのケースを考えている。

1、松下村塾

2、心学の系譜

3、兵法家・剣術者

4、後に明六社に集う人々

これ以外にもたとえば、荻生徂徠と護園学派にみられる勉強概念、口、朱子学系統の学者達の用例、ハ、蘭学者達の事例、ニ、藩校の用例があり、さらには二宮尊徳と報徳社の人々なども関連の枠内にあるが、このうちイ、については既に先行研究があるので屋下に屋を架す必要はない。ロ、ハ、ニ、については必ずしも無視するわけではないが、二、三の事例について関説することにとどめたい。二宮尊徳、報徳社の系譜については、「勤勉革命」とでもいったコンセプトのもとに検証したい事例であること、さらに主として既刊文献に拠る小稿とは違ったアプローチが有効と思われるので今後に俟ちたい。

次いで第二の近似・類似する用語とのかかわり、ニュアンスの違いなどに関することであるが、これについては次のように考えている。

勉強に近似する語としては、勉勵、勉精、勉焉、勉旃、勉勉…等の語があり、類似するものとしては、出精、精勵、入情…等がある。さらに実を云えば「勉強」ときわめて近い意味で「勉めよ」「之に勉めよ」というように語り、書き記している事例は無数にあり、勤勉、勤、務、努、力等の漢字をあてて表記されるケースをも対象にするならばほとんど茫漠としてきて、「つとめ・つとむる」という語に含意されるものとの間で相違を確定することが困難になる。そこで本稿では「勤勉革命」全般につながることになる勉勵、勉精、勉焉等の語はとりあえず検討の対象から外しておく。ただ勉旃については次のような事情から、これを一応「勉強」を用いた人々の近傍にある言葉として一考の対象とする。管見の及んだ範囲で「勉旃」は大塩平八郎「洗心洞筭記」に一例、鶴殿長快「一刀流忠世派伝書」に一例、島津忠恒の「兵術記」跋文に類似例一、報徳社関係に若干例と

いった程度で他の、勉勵、勉焉、勉精の頻出の度合いと比べると著しく少ない。しかし周知のようにこの勉旃は司馬光の「勸学歌」にあるものであり、この文章が我国で親しまれたのは「古文眞寶」冒頭に収録されているからであった。そしてこの文章に於ける「学問の勧め」は多分に立身出世をめざすものであり、従って宋学的な理想主義、或いは程朱のリゴリズムを欠いてはいるが、学ぶものの心構えを説いたものとしてやはり何かしか儒学の気構えを伝えるものにはなっているからである。「旃は之なり、焉なり…之焉の合声なり」という「経伝釈詞」の註を択るならば、勉旃は勉之、勉焉とかわらぬ語ということになる。しかし、「勉強」が頻出する「二宮翁夜話」や報徳社関連のものにも見られることに鑑みるとこの語は勘考される必要があると思われる。以上、二点をふまえた上で、次に前記一から四までのケースに限って具体例をあげ、幕末までの勉強概念の意義を探ってみることにしたい。

註1 江森一郎「勉強時代の幕あけ」(平凡社 一九九〇)を参照

- 2 「洗心洞笈記」下一〇三、岩波文庫319頁
- 3 「一刀流剣術目録序」(日本武道体系(同朋社 昭和五十七年) 第二卷剣術(二)174頁)
- 4 「兵術記」跋文 日本武道体系(同朋社 昭和五十七年)なお以下この叢書については「武道体系」として巻と頁のみ記す(第三卷剣術(三)145頁)

二 松下村塾に於ける勉強の意味 —— 「高杉晋作日記」に見る ——

松陰書翰に徴すると、松陰にとって勉強はよく筆端にのぼる言葉であったように思われる。それに又、松下村塾に於いて「お勉強なされ」ということが師松陰の口癖であったという証言もある。これを考えると、松下

村塾に集う若き獅子たちが、師の前では借りてきた猫のように畏縮して高説に耳を傾けてでもいるような情景を思い浮かべられるかも知れないが、事実はおそらくそうではなかったであろう。松陰が勉強を謂うだけではなく、彼の弟子達もこの語を口にする事によって自らを励ましていた様子がうかがわれるからである。たとえば松陰門下の驥足高杉晋作もその書翰や日記の中で「勉強」ということを繰り返している。日記には次のような述懐が見える。

余獄に下りてより一日として読書せざるはなし。或ひは黙読沈思し或いは高吟長嘯す。独立勉強し傍らに人無きが如し。一日、同囚予を嘲りて曰く、足下の罪、死生未だ決せず、而して読書勉強此くの如し、我輩、その意を解する能わず、請ふ、その説を聞かん、と。予曰く、それがし少くして無頼、擊劍を好み一箇の武人たることを期せり。年甫めて十九、先師二十一回猛士に謁す、始めて読書行道の理を聞く。先師に親炙すること、わづかに一周星、去りて東国に遊ぶ。我が藩俗論大に行はれ、遂に先師再び東獄に囚はれるに至る。それがし亦江戸に在り、師のために獄中に往來す。師それがしに示し言ふて曰く、汝、妻を蓄へ吏と為る父母の心に任して可なり、もし官に君側に就くを得ば、すなはち正論抗議、惟れ道ひ惟れ行へ、然らば則ち必ずや貶黜恬退の人となるべし。而して後、読書して心を練れば十年の後、大いに為すべきもの有らん、と。今、これを思へば言なほ耳にあるが如し。而して師すでに遠く去る。今を隔つること將に十歳にならんとして余の行ふところ先師の言と眞に符節を合する如し。因りて憶へば、予の今日の幽囚は先師謂ふところの貶黜恬退の時なり、それがし豈に勉強読書せざるべけんや。予、言ひて未だ了らず、而して同囚笑つて曰く、足下、師言、之を守るを得ば則ち可とす、然るに足下、もし斬首し獄に死せば、すなはち今日の勉強はすなはち昨夜の一夢ならん、何ぞ心を高妙に置き、老莊の域に遊ばざる哉、と。余曰く、生者何をか死と曰

はん、と。同囚、その説を擲揄せんと欲す。余、笑つて答へず、即ち、先師の言を壁上に書して以て自ら警む。(傍線・引用者)

(元治甲子六月七日 眞未定稿待他日而削刷)²⁾

この日記を書いた時、高杉晋作は萩郊外の野山獄に収監されている。この下獄の折の心境は、「獄中手記」冒頭の自叙から推察することができる。収監の初め、さしもの彼も自失茫然、後悔、鬱屈、自責の念がこもこもおとずれる。彼は記している。

下獄の初め既往を悔ひ、将来を思ひ、茫然として黙座し、身を省み心を責む。既にしておもへらく、我既に獄に下る、死測るべからず、何ぞ身を省み、心を責むるを用ゐん。ただ枯木死灰にして死を待つのみ。³⁾

しかし彼はやはり、彼である、百折不屈⁴⁾の人である。「一日、自ら悟りて曰く、朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり。」これこそ聖賢の道である。我、晋作は釈老の道を選らず、である。何となれば「枯木死灰に向かふは人道に非ず、而して朝に聞き夕べに死すは無量の眞樂なるを知る」⁵⁾からである。

野山獄、ここはかつて吉田松陰が二度にわたって幽閉の日々を送った場でもある。そのこともあつて晋作は師の言を思いおこす。先生はしばしば、勉強という言葉の口を口にされた。だが自分は果たして師の言いつけを守り、師の期待した人物になつたと云えるだろうか。縲紲の身をかえりみ、「明日の生必ず可から」⁶⁾ざる危難の裡で、先師のことを思い、彼は読書勉強の人たらしとする……。

この未定稿の、作者自ら「他日を待ちて削刷」せんと附言している記述の深読みは避けなければならない。ただこの六月七日の手記に先立ち、六月一日に書かれた「先師に地下に誓ふ」⁷⁾という言葉から推測されるように、

彼の勉強は或る覚悟をふまえたものであることは慥かである。事実彼は囚獄の期間、その名も「西海の一狂生」にふさわしくすさまじいまでの読書に集中している。六月七日の日記はこういった状況を考慮に入れるとやはり惻々として迫切するものあるを覚えしめる。つまり、獄を出ていつか青天白日のもとに雄飛し、回天の事業に挺身できる日がくるかどうか、そもそもその日まで命がもつかどうかもわからない。こういう状況の中で「勉強してどうなさるおつもりか」と高杉に向けて同囚が放った疑問は、「笑って曰」われたとあるが、要するにこんなさまで読書勉強するとは、おまへは本当にバカだという軽侮の口吻を露骨にしたものであつたらう。これに対して晋作が「生者何をか死と曰はん」と答えるのは、「死生未だ決せざる」という状況、つまりあらゆるものが不定の時にこそまさに「不可不勉強」であるという、彼の同囚には決して理解できない心境をのぞかせるものであつた。このことは、「朝に道を聞かば」と云い、「獄中手記」に繰り返される「死を度外に置く」という決意にもうかがわれるように、実に「勉強」が、「練心―心を練る―」のためのものだからである。「幾度か試練を歴て志はじめて堅し」とは、やはり維新回天の偉業を成した巨頭の言であるが、志士高杉晋作は、生死の行方知れず、或いは命旦夕に薄るを予感しつつ先師に対して詫びる気持ちと約束を果たさんとする思いを重ねて勉強するのである。これが彼の勉強である。その勉強が敢為の気象を養うための聖賢発憤の書を読むことであてられているのは非常に象徴的なことであると云つてよい。ともあれ、このように見てくると松下村塾に於ける勉強の奨励がどういうものであつたかは、或る程度明らかとならう。勉強読書のこと、執拗な読書の勧めと、これに応えるために、次から次と自らの課業として読書に励むというかたちであらわれるが、このことは同じく志士久坂玄瑞の日記にも見える。これらは読書によって知識をふやすというよりも、書籍は先聖、先賢の試練の跡を記したものであるということ、従つて書物を手にすることは先人試練の場に、自ら身を置き、先人が鍛錬を重ねたその蹤跡にならいたいという気持ちにもとづくものである。そして又、この試練の

先人として最も身近な人は、師吉田松陰であり、この人こそはまさに勉強を身に体した人であった。門下の者にとって、勉強とはこの人の生き方にならおうとする努力に他ならなかったのである。誰もが知る如く松陰こそは勉強読書の人としてまっさきに指を屈して数えられるべき人だったからである。

註1 横山幾太「鷗磻釣餘鈔」による。「先生曰ク勉ムヘシ〔言語頗ル丁寧ナリ御勉強被成レ〕」とある。「吉田松陰全

集」(山口県教育会編 岩波書店 昭和十一年) 第十卷548頁

2 「高杉晋作全集」(新人物往来社 昭和四十九年)以下「高杉」と略す―)下巻225頁347頁(ちなみにこの文は「幽室記」として知られるものと同じである。)なお読み下し文は前記「松陰全集」の訓点を参考にし、「高杉全集」の読みには従わないところがある。

3 「高杉」下巻217頁

4 元治元年六月十日付けの杉梅太郎あて書簡に「百折不屈候」とある。「高杉」上338頁

5 自叙「高杉」下巻217頁

6 「高杉」下巻224頁

7 「日記」六月朔旦を参照。「高杉」下巻225頁346頁

8 久坂玄瑞「九仞日記」、「江月齋日集」を参照(ともに前記「松陰全集」第十巻に収録)

三 心学の系譜

鼻祖石田梅岩に始まり、手島堵庵、中澤道二、布施松翁、柴田鳩翁と続く心学の系統のなかに「勉強」はどのように使われてきたかと問うのは無意味なことに終わりがかねないもののように思われる。というよりもこのような問題設定は念頭に浮かぶことすらもないものかも知れない。道二、松翁、鳩翁といった市井の教師達の講

話、道話は、こちたき話を避け、あくまでも平易な語り口に徹している。巧みな比喩は、日常茶飯の話柄のなかにそれとなく活かされ、人倫のありようを語って聞く者を倦ませない。さりげなく、しかし、しみじみと心の中に入ってくるこの話術は孔孟程朱をとりいれながらも、聖学のおごそかさや、道学のリゴリズムを感じさせることはないし、釈老に話が及んでも天竺、唐のけふとさ、ことごとしさは一切ない。インドのお釈迦様もシナの聖賢も近所づきあいの気軽さのうちに生きかえってくる。要するに袴をつけた人は語る側にも聞く側にもいないし、堅い話が特に意を用いたあとも感じさせずに受け入れられてゆく。倫理にわたり、徳義の肝腎にわけいりながら、肩のこらないこの自然なスタイルは見事という他はない。従って、このような語り口のなかに、いかめしい「勉強」のあとを読みとるのは興醒めな話ではあるう。しかもなお江戸時代の勉強概念を辿る小論にあつては、この学派の系統のうちにも二、三議論を立ち寄せなければならぬ。それは開祖石田梅岩の次の言葉に注意を向ける必要があるからである。

学問の至極といふは、心を盡し性を知り、性を知れば天を知る。天を知れば、天即ち孔孟の心なり。孔孟の心を知れば宋儒の心も一なり…。心を知るときは天理は其中に備る。(傍線・引用者) 「都鄙問答」 卷二

右に引用した「心を盡し性を知り…云々」は「孟子曰、盡其心者 知其性也 知其性則知天矣」とのつながりで注目されること、贅言を要しない。そしてこの盡心、孔孟の心、宋儒の心ときて「心を知るときは天理其中に備はる」と結ばれていることに石田梅岩の考えが「心学」と称せられる根拠がある。

ところで「心を知る」ことが学問の至極であるとして、そのためには「心を盡くし」て「性を知」らねばならないが、この「知性」を正面に掲げたことが心学なるもののいかかわしさを感じさせるとして当時の士人、

学者から攻撃を受けることになる。このことは、「都鄙問答」の冒頭において心学が異端であり、異端と云われるわけは「其者が別に私意を以て教を立て、世上の愚なる者を誣しくらませて、性を知るの心を知ると、向上の議論を為し、人を惑は2」しているからである。「性を知ると云ふは、古の聖人賢人のことにて、後世の人及ぶべき所に非3」ざるからである……云々。

「都鄙問答」巻一冒頭のこの異端問答は「都の人」と「鄙の人」の含みをいろいろと想像することができ、きわめて興味深い導入となっているが、そのことについては今は触れない。ただこの異端という批判にたじろぐことなく、梅岩が展開する答弁の中に小稿にとつて見逃すことのできない論理がある。それは「性を知ると云ふは、いにしへの聖人賢人のことにて後世の」我々にはできないことだという難詰に対して梅岩が応じているその返答に見られる。つまり聖人、賢人に我々が及ばないことは当然だとしても、その「及ばない」のは、「徹頭徹尾及び難」いものなのか、それともなんらかの仕方で及ぶことができるようなものなのかということである。心学即ち心を知ることの大切さを主張する梅岩に対して、心を知るとは誰にでもできることなのか、を問うやりとりの間に次のような答弁が展開される。

曰く、然らば心を知るときは、直に賢人にて候や

答、否。身に行はざれば賢人にあらず。知る心は一なれども、力と功とは違ひあり。聖賢は力強くして功あり。中庸に所謂、安んじて行ふは聖人なり。利して行ふは賢人なりと云ふこれなり。我ら如きは力弱くして功なし。或ひは勉強して行ふ是なり。然れども心を知るゆゑに行はれざることを困4しむ。困しむといへども行ひおほせ、功を為すに及んでは一なり。

右の答は実に見事なものであるとしか評しようがない。誰もが知る中庸第二十章の「生知安行、学知利行、困知勉強行」という人品の三段階をたくみにとりいれていることは言うまでもないが、この三段階の差を「力と功」というものの差としてとらえていることがその一であり、もう一つは知ることが行うことに直結しなければ賢人ではないということにしていることである。生知の人即ち聖人、学知の人即ち賢人、そして困知の我々という三種の人間を分かつのは知であるが、この知によつて等級がつけられるにもかかわらず「知る心は一」というのが梅岩の考えであった。この何が画期的であるかと云えば、聖人であれ、賢人であれ、我々であれ、知る内容は一つのこと、つまり「同じ心」を知ることにある。従つて三種の人間の差は「力と功」に於いて生じてくるが、これは意を汲んで解すれば、力、即ち能力の高低は、功、つまり作業に於いて一定時間内の出来高の差となつてあらわれるということであり、同一目標の達成にあたつて遅速の違いが出てくるということでもある。しかし、この差は作業量の差であり、時間差であつてそれ以外の差ではないと断じているところに梅岩の思想の卓拔さがある。だが「心学」を難ずる者はなお批判の矛先を向けることをやめない。

曰く、道は楽しむべきことなるを、困しむことを学ぶとは如何なることぞ

答、たとへばここに相駕籠あひかごかく二人のものあらん。一人は力強く一人は力弱し。強きは苦しまず、弱きは苦しむ。苦しめども駕籠かごを昇かくゆへ飢ゆることを免る。駕籠に出ざれば乞食と成りて路頭に立つなり。道を行ふことも此くの如し。我ら如きは力弱き駕籠かきに同じ。苦しみながらも行ふゆへに不義に陥らず、是を以て心安し。⁵

もはや説明は不要であろう。ここには聖賢に関する新しい考えが出てきている。又、苦勞することが何故に大切なのかということについても行き届いた説明がなされる。不義を行わず、働いて「父母の衣食を足し、安

楽に養ひ、諸事油断なくつとむるときは、身は苦勞すといへども邪なきゆへに心は安樂⁶である。「我教ゆるところは心を知りて、身を苦勞し勉むれば、日々に安樂に至ることを知らしむ。」ここに繰り返されている「勉むる」が「勉強」の意味であることは云うまでもない。

梅岩の聖賢観は、これまでの懸絶する聖人、屹立する賢人の像とは異なる。なるほど、聖賢と我々との間に差はあるものの我々が不義にはしらず邪悪なことを為さず、正直に苦勞を重ねてゆけば、やがては近づいてゆける先人であった。彼ら聖賢がはるか先を進んでいても彼らの道を辿ること、この道をどこまでも追い続けることは、難渋、苦渋の道程ではあるが、決してあきらめないこと、そうすれば次第に彼らの足跡が見え、やがては彼らの背中も見えてくるであろう…。ともあれこのような道行きの努力が「勉強」という語で表現されるものであった。

梅岩のこうした考え方が我が国民の職業倫理に決定的な影響を及ぼしていることについては、既に様々な論究があり、贅言を重ねるには及ばないが、露伴が「辻浄瑠璃」に於いて「勉強に心を…」と書いてこの勉強にまめとルビをふるるとき、心学の影響の大きさが思われる。

梅岩のあと心学は手島堵庵、中澤道二等によって新たな言語表現を得るが、その中で儒学とのかかわりに於いて注目すべきことを一つだけとりあげておきたい。それは堵庵の息上河正揚がその著「聖賢証語国字解」で展開する「本心即ち鏡¹⁰」とする考えである。

心学は「心を見つけ心を知る」ことを最も肝要な課題とする。これは先にも述べたとおり、孟子の「盡其心者知其性也知其性則知天矣」に依拠しているが、この「盡其心」について上河は次のように述べている。

○ …其心とは、夫々己（それぞれおのれ）に具はりある處の本心を云ふ。此の本心に天地万物一切の道理を具へ居る故に一つ事に応じて皆それぞれ埒を明けざる事一つもなし。性とは心の本態にして即ち心に具はりたる道理を云ふなり天とは即ち天理にして一切一物の理の本源なり。即ち人は天理を性とし、心とすれば、心也、性也、天也、各々指す處ありて名はかはると云へども渾（まる）で一也。

○ …本心の全き處を盡しおほせたる處を盡心とは云ふ也。此の外別に性を知るといふものあるにあらず。心を盡しきりたる處が即ち知性たる處也。知其性則知天矣は、右に云ふ如く元より性と天と二つにあらねば、直に知性は即知天との玉ふこと（也）猶是を譬えば、本心は能く磨（とき）すましたる鏡の如し。能く万事万物に応じて埒を明けること鏡の一切万物を照らして何一つうらぬものは無きが如し。さてその鏡によく物をうつす處の道理が具へてある。是れ鏡の徳にして是を性といふ。…鏡の全体は心の如し。其の照らす所以の道理あるは、即性也徳也。…

○ …聖人は生（うぶ）のままにて生涯其の鏡を汚し玉はず。凡庸の者は其鏡を日々月々に汚す。故に一面の鏡を滑（べつたり）と蓋をしたるが如く、錆びつき垢つきて、光明を失ふに似たり。故に学問して先覺の差図に就いて漸（そろそろ）其鏡を磨き見れば、光明赫々とあるを知る。夫よりだんだんと、今日も磨き、明日も磨き、日に新たに日々に新に、磋（とき）おほせたる處が、元の一面の鏡の光明赫々として一点の曇りなきが如くなる。是を其の心を盡すと云ふなり。

長い引用になったが、本心は鏡であるということ、盡心とはこの鏡である心が錆びつかぬよう、垢つかぬよう日々磨き続けることである。そしてこの懈怠なく磨き続ける努力が「勉強」であることは、上河正揚の父手島堵庵の著「知心弁疑」の問答によって明らかになろう。直接の引用は煩瑣にわたるので以下要点を摘記する。

即ち、

「本心を知るは甚だ重き事」と思われるのに先生はこれがたやすいことだとおっしゃられるのは、自分には納得できないとしてその眞意を問いただされたとき、堵庵は、俺が俺がという我が強い人、つまり一般に成人がそうであるが、この成人に比べると赤子は我がないだけ本心そのままに生きていると言つてよい。大人即ち我が師梅岩先生は「本心を知るを以つて入徳の初め」としていたから、私もその故に、つまり「初め」は入り口に過ぎないのだから、知ることをむずかしいとは言わないだけだ。要するに、大切なのは本心を知った後のことであり、本心を養うことが困難であることをよくよくわきまえることだ。それゆえ、本心の「涵養（ひたしやしなふ）は学者終身を期として勉強つとめべきの大事也……」

と結んでいる。¹¹

息子上河正揚の言葉で云えば「本心である鏡を磨き続けること」であり、父堵庵の言葉で云えばこれが「本心を涵養」することとなるのであるが、この生涯にわたつて継続する努力が「勉強つとめ」¹²という言葉で捉えられていることは明らかである。ともあれ心学の勉強がこうした「本心」を見つけ、これを常に懈怠なく守り続けることにあることは、三遊亭円朝がその人情噺の代表作「塩原多助一代記」を閉づるにあたって述べている次の結びの言葉に示されている。

「また多助は江戸表に置きましても稼業に出精しまして、遂に巨きな身代となり、追々に地所を買入れ、廿四ヶ所の地面持とまでなり、本所に過ぎたるものが二つあり、津軽大名炭屋塩原と世に謡はるるほどの分限に数へられ、其家益々富み栄えましたが、只正直と勉強つとめの二つが資本もとでありますから、皆様能くこの話を味

はつて只一通りの人情話とお聞き取りなされぬやうに願ひます。」(傍線・引用者)

ちなみに、右の引用文一行目に「稼業に出精」とあるが、この出精、或いは「精を出す」「精を入れる・情に入れる」は心学の講話・道話に於いてほとんど勉強と同じ意味でつかわれている国語である。

註1 以下、石田梅岩「都鄙問答」(岩波文庫)による。51頁

2 同19頁

3 同19頁

4 同24頁

5 同25頁

6 同25頁

7 同25頁

8 「大家の主人は却つて中位の立つる者よりは萬般質素に身を持ち勉強まめに心を働かせねば僕婢の輩の見侮りて……」
「辻浄瑠璃」第五(明治二十四年)を参照。

9 「聖賢証語国字解」寛政四年(一七九二)に拠る。なお、刊本は加藤咄堂編「国民思想叢書」(巻六) 儒教篇
(昭和四年)に収めるものを用いた。

10 孟子の項を参照。同書499頁以下。

11 白石正邦編「手島堵庵心学集」(岩波文庫) 62頁

12 手島が勉強を「つとむ・つとめ」と訓ずる例には他に「また勉強つとめて善言を唱へなば、心これがために感じて善
にうつるべし」(「兒女ねむりさまし」)などがある。日本思想大系42「石門心学」144頁(岩波書店)

13 「塩原多助一代記」(岩波文庫) 240頁。なお、円朝を心学とのかかわりで捉えることについては、森鷗外「洪江
抽齋」百十三を参照。

四 兵法家・剣術者と勉強

剣法の奥義を伝える巻物、これは各派それぞれに門外不出の秘伝書として免許皆伝の師承の間に大切に保持されてきたものであるが、この兵法書の中に儒教的、わけても宋学的な背景を感じさせるものが幾つかあらわれてくるのは近世に入ってからである。兵法者は生死の間に出入りし、たえず死を意識する局面に身をおく者である以上、なにほどか心の支えを必要とし、宗教的世界とかかわりを持つに至ることは見易い道理である。だがことはそれだけではなく、その修行の過程で瞬時垣間見える絶対的なものへの近接が著しく求道的な心境へと人を誘うものがあることも事態の根底にはあるであろう。それは前章で述べた心学、これを狭義の心学とすればこれが成立する前の広義の心学、つまり心即理に立脚した陸象山、王陽明の所謂陸王学や、朱子学をもうちに含んで心性そのものの錬磨に挺身した士大夫の学問であるが、これらの学問は釈老へ傾斜する面をあわせもつがゆえに死に直面しつつ道を求める人たちの心をとらえるものがあつた。こうした傾向は夙に沢庵禅師が柳生宗矩に「不動智神妙録」を示した事例にうかがわれるものと同じ流れにあると云つてよい。禅師と但馬守の親密な関係には劍の修行が禅機の開発とつながっていたことがうかがわれるが、禅がでてくるならば、宋学、さらには宋明理学へとかかわりが広がってゆくのは当然である。さて、このような背景を考慮すると、安心立命を求めるにせよ、或いは求道の一環としての修業であるにせよ心性の開発と云つた事柄につながる動きが注目されることになる。¹ともあれこうした動向のうちに勉強の変遷を辿ることもできないわけではない。はたして文化・文政へと到る頃、勉強は一つの兵法書の中に繰り返し繰り返し表れることになる。次にその幾つかを摘記しよう。²

- 1、…此兵法亦斯くの如く神丹道枢と成り、惟れ精、惟れ一に誠に天真至道の環中を得て能く無窮に感応するの機を得るを常の法とす。学者勉強する事久しくして能く慣熟する則は、其技を為すや無極の広野に中立化行し³…
- 2、…故に学者勉強する事久しからざれば明を生ずる事能はず⁴…
- 3、…孔夫子だに斯くの如し。故に学者此の術を欲せば自ら勉め心を焦し慮を苦しめ、此の深意を知りてこれを精修し、其眞を得て常に行ふ者にあらずんば、安ぞ能く此の術の妙を得んや。…中庸に曰く、自ら誠に明なる之を性と謂ふ、と。性は天道に稟く、故に天然自然、天道の誠にして明かなりと雖も、人は天道、地道、清濁の混じて其の形体を成す。故に性の明かなるも濁気の為に蔽はれ、天稟心性の明徳明かなる事能はず。故に教に因りて己身自ら勉強して天道心性の誠を明かす。故に曰く、自ら誠を明かにする之を教と謂ふ、と⁵…
- 4、…其の天稟既に高く之を知ること既に深く神を凝し練丹して以て真空赫機を養ひ、漸く至大至剛の域に入りて顛沛造次、しばらくも之を遺さず、淳直謙遜、毫も自負無くおよそ斯くの如き人勉強して懈らざれば、其の眞を得るに幾し⁶
- 5、…神機を九天の外に満たしむるの思ひを成し、練丹勉強して是を行ひ、夙夜懈らずんば之を得ること豈に遠からんや⁶。
- 6、…誠を先にし身を後にする時は、為す所慈ならざる事なし。誠を先にし身を後にする時は、行ふ所儉ならざる事なし。…此の兵法、真空赫機を先にして身常に後る、身常に後るのみに非ず、能く空機に和し神丹に入る。故に触る所破らざる事なし。学者勉強せずんばある可からず⁷。（傍線・引用者）

右に引用した文章の意味を理解するのは容易なことではないし、又、この文章の含意を味読することは小稿の目的ではないので内容には立ち入らない。ただこれらの引用文にどのような思想的背景があるかについては一言しておく必要がある。以下、最低限肝要な点についてのみ記す。

文中、神機、神丹、練丹、真空、空機、等の語が見られることから、人は直ちに釈老の影響をここに指摘するであろう。さらにこれが書かれたのが天保の頃ということを知れば、白隠とのつながりに思いを馳せるであろう。しかし、「中庸に曰く」が繰り返されることもさりながら、頻出する「誠」字から、この文書が「中庸」を背景にその語彙群に依拠しつつ書かれたものであることも明瞭である。従ってここに出てくる「学者」は学ぶ者ということであり、現今の科学者と専門学者という意味で念頭に浮かぶ存在とはまったく異なるものであることは言うまでもない。そこでこの「学ぶ者」が何を学んでいるかと云えば、それは兵法、つまり剣術である。そして、1、2、3、等の文章の学者と勉強のかかわり方は、6の「学者勉強せんばあるべからず」という強い語気で断定されている事と全く同じであり、剣術を学ばんと欲する者は、2の「自ら勉め心を焦し慮を苦しめ、此の深意を知りてこれを精修し、其の眞を得て常に行ふ者」でなければならぬ。剣術を学ぶことは、このように「心を焦し慮を苦しめ」、「夙夜懈らず」練丹勉強することに他ならない。

さて剣の道の奥義を窮めようとする者は、現在の表現を用うるならば、身を勞し、早朝から深夜まで厳しい稽古に明け暮れなければならない。これが「勉強して懈らず」ということであり、別に困学とも苦学ともいわれることである。而して剣の道に志すものが何故に斯くも厳しい勉強をしなければならないのか、と問われるならば、劍士は答えるであろう。「斯くしてこそ、天真至道の環中を得られる」と。「無窮に感応することができる」と。そして無窮に感応することこそ誠のみちへの捷徑なのであり、或いは誠を体するための不可欠の条件ともなるからである……。ともあれ、身心を刻苦する厳しい修行が勉強の内実となっていることはここに明

らかとなる。このことはやがて幕末の剣道の達人と彼をとりまく武道家達に於いてくつきりとしたかたちで示されることになる。以下、二つばかり例をあげておこう。一つは槍の名人にして高潔な人格をうたわれた人の伝記に出てくる用例であり、もう一つはこの人の後を襲いだ剣術家の苦行を窺わせる文である。

一、近來槍法の絶技なるもの山岡先生を踰ゆるなし。名は正視、字は子巖、通称紀一郎、静山と号す。江戸の人なり。家世々幕府に仕ふ：先生幼時より刀・槍・射・騎、水におよ泓ぎ、書を読み、字を習ふに発憤して勉強せざるなし。年十九、省悟するところあり、慨然として曰く、我今より精を専らにして槍を学ばんのみ、と。：勉強非凡なり。嘗て昇平日久くして士風柔墮なるを慨き自ら古の士にキキ跂及せんことを期し緩急の用に応ずるを庶こひが幾ふ。嚴冬寒夜繩を以て腹を約し水をたたき水を灌いで満身淋漓たり。東、日光廟を拜し叩首して黙禱す。丑の時場に入り、十五斤槍を操る。突つ衝の勢ひを作すこと或いは三千（回）或いは五千（回）、或いは黄昏より鶏鳴に到るまで三万回。嘗て竹七尺許りをきり之を把りて高履カウケキを踏み弟子を試較するに槍に異ならず……¹⁰

二、秋來諸組槍劍の稽古日課相ひ定め、御番士及び小普請等の士に其の技を研究して懈怠なからしむ。其諸士を教誨するの意懇切々誠に感謝に堪へざる也。而して御番士及び小普請等の士、皆上諭の辱きを知らず。遊蕩放逸名利に趨り粉骨碎身其術を勉強する者は一組の中両三人に過ぎず。万一非常の変あらば何を以て之をふせがん、実に歎ずべき也。然りと雖も之を励ますに法あり。：夫れ勇士は古の士也。怯士は今の士なり。百金は賞なり。猛虎は罰也。故に勇士は賞を以て之を率ゐ、怯士は罰を以て之を率ゐば、ひとしく共に深谷を踰ゆしむるに足る。其れかくの如くんば、則ち遊惰の士は變じて勉強の士と為り、怯弱の士は化して勇敢の士となり国勢を一新し武備を強固にする、日を教えて待つべし矣。¹¹

三、予二十四才の時、一週間立切千四百面の試合を爲せしに、更に疲労衰弱を覚へず。夫れ剣法は勝負は勿論なれども心を練るを肝要とす。其故如何となれば、心を盡る期なし。其の心を以て敵に対し心を以て働きを爲すときは、幾日試合をなすも必ず疲労なく衰弱なし。修行者、此の理を能く能く工夫して勉強すべし。¹²（傍線・引用者）

一、は山岡静山の槍の修行のすさまじさを伝えるものであるが、彼は日々その道場に入るにあたって身を潔斎し、その上で体力の極限を幾度も幾度も超えてゆく苦行を自らに課していたが、このことを勉強という言葉で表現したものである。¹³

二、三、は剣道家山岡鉄舟の粉骨碎身の修行、特に凄絶とでも形容する他はない苦行の日々を伝える記録に拠るものである。彼に於いて剣による鍛錬は「人一たびして之を能くすれば己は之を百たびす。人十たびして之を能くすれば己はこれを千たびす」という「中庸」の困知勉行さながらに百鍛千錬の行であり、これはその全生涯にわたって続いた。就中彼の道場春風館の終日立切（たちきり）二百面を七日間課すという第三期誓願の行は、人間の修行の歴史の中でもちよつと類を見ないものとして、そのすさまじさが語り伝えられている。そして彼の剣術修行のこういった様子は、勝海舟や或いはその弟子が「勉強」という言葉で語っているものでもある。二、はその彼が千葉周作に提出した「意見書」から、三、は立切誓願の垂誨からとつたものである。ともあれ幕末の武道家たちにあつてはこのような修行の場こそが勉強の場であり、熱烈な修行を形容する言葉が勉強であつたと云つてよい。そしてまさにこのことから勉強という訳語についての検討が意味をもつてくるのである。

本章に於いて引用した一、の文章即ち槍術家山岡静山伝の著者は誰あろう、中村敬宇である。敬宇は山岡静

山の実弟、即ち高橋泥舟と昵懇であった。そして泥舟とは云うまでもなく海舟、鉄舟と並び称される幕末の三舟である。ところでこの敬字、即ち中村正直とはこれ又よく知られたる維新後最初のベストセラー「西国立志編」の訳者その人に他ならない。ここに我々は、勉強という徳義、勉強の重要性を鼓吹した「西国立志編」が幕末までの勉強概念をどのように保持し、どのように変えたかについて検討する段階に達した。

註 1 兵法家、剣術家についてこれを思想史の面から論じたものとしては、富永半次郎「剣道に於ける道」（中央

公論社 昭和十九年）、大森曹玄「剣と禪」（春秋社 一九八三）の二冊から多くを教えられた。

2 白井亨（東都 白井義謙述）「兵法未知志留辺」による。

3 「兵法未知志留辺」からの引用は武道体系第九卷（一九八二）に拠る。同書²⁹³頁

4 同²⁹⁵頁

5 同²⁹⁶頁

6 同²⁹⁸頁

7 同²⁹⁹頁

8 同³¹⁰頁

9 なお「兵法未知志留辺」には、他に「捨遣」があり、又「兵法至途宇之千利」がある。この両書にも勉強は頻出する。これらについては、筑波大学武道研究会編「剣法諸流心法論集」下巻（平成元年）の以下の個所を参照。「捨遣」159・162・166頁、「兵法至途宇之千利」201・210頁等。又、天真白井流以外の流派の兵法書の中に勉強が出てくるものとしては「直心影流初伝目録」武道大系第三卷³⁰⁶頁、「神道無念流順免許」同三卷³⁵⁴頁等がある。なお、桂小五郎、高杉晋作は剣術家としては神道無念流に属する。

10 中村正直「敬字文集」第十二卷 第五分冊（明治三十六年刊本）27

11 「鉄舟居士言行一斑」に見える。「全生庵記録抜萃」（大正七年）25頁

12 同書54頁

13 静山の苦練を伝える「嚴冬寒夜 繩を以て腹を約し、水をたたき、水を灌いで…」という記述が「宛然さながら文覚上人那智の荒行の如くに、荒繩を以て腹を縛り、水を割って頭から水垢離を取る」ものであったことについては、葛生能久「高土山岡鉄舟」（昭和四年）に興味深い記述がある。同書30頁参照。

14 海舟は鉄舟の剣法修行について「…剣法を学び、一寸も怠らず勉強するものだから…」といった評を下す。又、弟子が伝えるものとしては、「…先生多くも言はず、唯これなりと一寸示されて、剣法の極意たるや易き事は極く易し、難き事は亦甚だ難し。然れども怠らず勉強をなせば、分明の時到来すべし。勉旃々と云はれたり…」といったものがある。勝部貞長編「山岡鉄舟の武士道」（角川文庫）51頁。香川善次郎手記「覚書」（大森曹玄「山岡鉄舟」昭和四十三年所収）該書新版263頁参照。

五 中村敬宇とその勉強困学の生涯

これまで「勉強」の意味について一、「高杉晋作日記」から松下村塾の例を、二、「都鄙問答」等に即して心学に於ける意味を、そして兵法書などに拠りながら、三、兵法家に於ける含意を探り、幕末までにどのような意味がこめられていたかを見てきたが、次に「明六社」に集う人々を対象にする段階に達した。ここで「明六社」に集う人々といった場合、森有礼、福沢諭吉、西周、西村茂樹、津田真道…、等々の名がうかぶわけであるが、いずれの人々も明治開化期のリーダーとして近代思想史に大きな足跡を印しており、この人々を逐一検討することは小稿の課題を超える。そこで、今問題にするのはわずかに一人だけ、しかもそれは訳語としての「勉強」を定着させた人としての重要性から中村敬宇にしばらくざるを得ない。

思想家としての中村敬宇についてのどのような評価を下すべきかといった一般論に立ち入るのは控える。行論

に必要な限りで敬宇の用例を検証するだけで満足しなければならない。

空前絶後の弱年にして昌平覺の御儒者に拔擢された敬宇は幼にして俊童の誉れ高く、まさに苗にして秀でる者であったが、通常の神童と異なりしは、秀でてしかも実りたる者となったことにある。¹これはその天稟の卓越せしことにあるはもとよりであるが、誰しもが認めるようにその刻苦精勵、孜々兀々の研鑽がまさに殊尤きわむる点にこそその理由が求められるのである。しかも彼においてなお注目すべきことは寡欲謙虚なる資性が「訓盲啞院」の創立といった事業に發揮されたことであり、まさに仁慈均霑衆人をして斉しく、その徳風を欽慕せしむる底の人柄の持ち主であることであった。このほとんど徳学兼備の人格は江戸川聖人の名を冠せられるに至ったが、近代に於いてはやや異数のこの評語も藤樹の近江聖人にこそ一籌を輸すとはいえ、過褒の諛辞として斥けるにはあたらなうであろう。ともあれ蘇峰の評せし如く醇儒こそは敬宇の爲人と生平を伝えて最もふさわしき語ということが出来る。

扱て右に見たように昌平覺の儒官たりし敬宇が明六社の人となったのは、他の幕末漢学者の命運に比すれば甚だ異例のものであることは云うまでもない。ここで多くの人は徳川幕藩体制の瓦解とともに、封建の世の遺物として忘却のかなたに消えていった漢学者の中で、ただほとんど彼だけが、何故に文明開化の時代の思想界のリーダーたり得たのかを不思議に思われるであろう。これは至極当然の疑問である。しかし答えははっきりしている。それは彼が勉強の人であり、困学の人であったからである。

聖人と謳われた人、しかも或る評者によれば、彼こそは「生まれながらに知る人」であったのだが、その彼を困知勉強の人であるというのは、人品を三等級に分ける「中庸」の考えには矛盾することになる。しかし彼の生涯をたどってみれば、この人はやはり勉強の人であったと云わざるを得ない。

彼は維新に先立つ十数年前、身は儒官でありながら、蘭学に精通すべく勉強していた。これは彼の公人とし

での立場からすればまさに危ういことであつたが、これを忍び凌いだ。これだけでも尋常一般のことではない。米艦の浦賀来航、薩英戦争等、風雲急を告げる中、欧州の力の中心がオランダにはなく、学問の大勢は英学によらでは把握できないことを察知し、英語の研鑽に多大の努力を払つた。そして幕府瓦解の直前に英国留学生取締として十代の少年たちにまじりながら英国に渡るのである³。敬宇、このとき実に三十五才なり。

「右手に漢書、左手に洋書」を持つ人として攘夷派の暗殺対象となりながら渡英し、滞英中に幕府瓦解の報に接した履歴というのはいはり稀なるものであると云わざるを得ない。ただこの稀なる人生を送りながら悲惨、不幸、不運といった負の陰翳をとどめないのが敬宇の人柄がさらに稀なる所以である。劇的な運命に際会しながらそれに翻弄されずに確固とした仕事を爲し遂げた人、それが敬宇であつたが、このような強さは、困学の日々を耐えぬく間に培われた強さであろう。嘉永癸丑年八月十七日夜五時と明記された十条の誓詞の一条に「百事に勉強し怠惰ならざること」⁵と明記されているが、この勉強の誓いこそはまさに困知勉強の人の本領であると云わざるを得ない。この人が明治四年「西国立志編」を世に問うたこと、しかもその際この書の中に登場する泰西の力行の人、勤勉の人、努力の人、そうして成功し立身出世した人々そのその努力の姿を「勉強」という言葉におきかえて行つたこと、このことの意味をようやく問題にするところに至つた。

註 1 石井研堂『自助的人物之典型 中村正直伝』明治四〇年、成功雜誌社（以下、石井『伝』と略す。）に附載せる徳富蘇峰の文を参照。

2 石井『伝』に附載せる徳富蘇峰の評に見える。

3 敬宇の英国渡航のことについては林董「回顧録」同「後は昔の記」（ともに平凡社東洋文庫にあり）にその一斑が知られる。そこには「其氣根の強きこと敬服に堪えざりき」といつた賛嘆が披瀝されている。同書19・

139頁参照。

4 敬宇には「徳福合一の説」があり、その内容を知らざる人々からは、通俗道徳の説教者のように思われがちであるが、深い人生智を秘めたものであり、軽々に扱ってすまされるものではない。これについては、井上哲次郎『日本朱子学派の哲学』（明治三八年、富山房）のなかに詳しい論評がある。また、『西国立志編』第四篇一の「福運は眼目をそなう」の章を参照。

5 「伝」20頁

六 「西国立志編」の訳業について

「西国立志編」は幕府瓦解後、徳川家譜代の家臣・旗本がこぞって江戸から静岡に移ったその時、儒臣たりし敬宇も静岡に「遷住」退隠したが、その地での静閑裡にイギリスからの帰国に際して贈られたサミュエル・スマイルズの「セルフ・ヘルプ」を訳出したものである。その内容を汲んで「立志編」と改題したところにも彼の意気込みがうかがえる。

原本は刊行（一八六三）当時から評判頗る高く、「既に英国ならびに他国に博く行われ、「アメリカに数種の版ありて印行しオランダ、フランス、ドイツ、デンマークの人々その邦語を以て訳」出したところの国際的なベストセラーであるが、これは本邦に於いても一旦梓に上るや空前の売れ行きを示し、文字通りに洛陽の紙価を高からしめたものである。

この内容は欧州の独立独立歩の人たち、克己により自らを鍛えた人、こうすることによってひとかどの人物となり、なほどうかの事業を爲した人の力行のすがたを綴ったものである。敬宇がこの訳出に踏みきった動機は、滞在中に知った英国人の生活、とりわけその国民性に強く魅かれるものがあつたからである。滞在は、急遽帰国せざるを得ないということもあり、二年に満たぬ短いものに終わったが、ある確信に到達したことは確

かである。それは「国に自主の権あるゆえんの者は人民に自主の権あるによる。人民に自主の権あるゆえんの者はその自主の志向あるによる」ということであつた。そして西国の民こそこの自主の志向を持つ人々であり、この人々は「百姓ひやくせいの議会ひやくせい（パラメント）」に権限を委ねるが、この議会の構成員「民委官（メンバー・オブ・パラメント）を掄えらぶ」というのが西国の政治の仕組みであり、西国では君主といえども「己の意をもつてすぐ一令を出す」ようなことはできない。ともあれ、「民委官は必ず学明らかに行ひ修まるの人なり。天を敬し人を愛する心ある者なり。己に克ち独りを慎しむの工夫ある者なり。多くの世故を更え艱難に長ずるの人」である。…こういう人こそ実は自助の人であるが、自助の精神とは「およそ人たる者の才智の由りて生ずるところの根元」であり、「自ら助くる人民多ければその邦国必らず元氣充実し精神強盛」である…。

スマイルズの「自助論」はこういう考えに基づいて西国古今の俊傑を選んでその人々の艱難辛苦のさまと、その艱難を試練としてうけとめ、それを如何にして克服していったかを描いたものである。従つてこの中に登場する人物はいづれ劣らぬ努力の人々であり、この人々の努力を敬宇は勤勉、勤修、勤苦、勉励、勉勞、勉強、勉力、勉学…等々の言葉で表現するが、なかで最も頻用されているのは勉強である。たとえば、第二編は次の文章で始まつている。即ち

「英国の人民、その風習性格、種々著しきものある中に職業に勉強する精神あることその一なり。史冊に載するもの肩を比べ、今世においても古に譲ることなし。英国版図内の工業昌盛にして、貨財生殖するその根元基礎は国人にこの勉強の精神あるによりて建立せらるることなり。」（傍線・引用者）

さて「勉強」の使用には幾つかのパターンが見られ、単独に用いられるケースの他、次のような特色ある表

現が類出する。一つは勉強にもう一つの二次熟語を重ねるケースであり、これには勉強労苦もしくは労苦勉強、勉強忍耐或いは忍耐勉強、発奮勉強、勉強労作、勉強学習といった用例がある。次いで対になる言葉と一緒にあらわれるケースで「儉省にして勉強」「才能ありて且つ勉強」といったものがそれである。ここではこれ以上立ち入ることはできないが、ただ幾つかの訳例の原語をあげて、敬字の「勉強」がどういうものに対応するかを見ておきたい。

○ ワットは最も勉強労苦せる人… Watt was one of the most industrious of men…

○ ロバート・ピールは第二世の製造者にしてはじめてバロネットの爵位を得たるものなり、才能ありて且つ勉強なることその父に彷彿せり… Sir Robert Peel, the first baronet and the second manufacturer of the name, inherited all his father's enterprize, ability and industry.

○ …中等の資性を具うる人といえども勉強して心を用い労力して倦むことなければあまたの事業を成就す… (… example of) how mach a man of comparatively moderate powers can accomplish by means of assiduous application and indefatigable industry .

○ ブルームは勉強することを好み久しく習いて癖をなせり⁹。

such was Brougham's love of work — long become a habit —

そのするところ、何事に限らず極善極妙に至ることを務めとせり。ゆえに世人評して「もしブルームをしてシユー・ブラック（靴を磨く人）ならしめば、英国第一のシユー・ブラックとなることを得ざるうちは勉強してやまざるべし」と云えり¹⁰。

such was his love of excellence , that it has been said of him that if his station in life had been only that of a shoe-black, he would never have rested satisfied until he had become the best shoe-black in England .

○ 勉強刻苦せる伝法教師モリソン… Morrison, another laborious missionary…¹¹

○ けだしシェークスピアは深沈なる書生にして勉強して業を做せる人なることは疑いなし。¹² In any event, he (= Shakespear) must have been a close student, and a hard worker…

勉強の用例を原語とともに網羅することはできないので、ここには若干の例をあげたにすぎないが、大方の予想がつくように industry, industrious が勉強に対応する例は非常に多い。次いで最後から二つ目の例のように「骨を折る」「辛酸・労苦をなめた」等のニュアンスをもつ labor, laborious, さらに work 等の語にも勉強はあてはめられているが、これらは文脈を考えれば妥当な訳語と云ってよく、特に異とするにはあたらないうちに思われてくる。しかし、一見したところ何も問題とすることがないところに、実は深く考慮しなければならぬことが潜んでいる。以下、章を改めて検討してみよう。

註 『西国立志編』は講談社学術文庫版による。また、サムエル・スマイルズの原典は、左記の版に拠る。

Samuel Smiles, *Self-Help: with illustrations of Character and Conduct*. London 1863

数字の依拠したのは、一八六六年版であるが、小稿では、一八六三年版を用い、対応する箇所を表示する。訳文は、講談社学術文庫版の編・章を、原文は該書の頁を算用数字で記す。

- 1 「自助論 原序」邦訳（学術文庫版）48頁
- 2 同51頁
- 3 同53頁
- 4 同55頁
- 5 同102頁

◎「勉強」という訳語について

12	11	10	9	8	7	6
一編 二二、 9頁	一編 二三、 9頁	一編 二九、 19頁	一編 二九、 19頁	一編 二八、 17頁	二編 一一、 37頁	二編 七、 26頁